



* 2 *

奥秩父・甲武信岳の一滴に端を発する荒川はやがて大河となり、173^時先の東京湾に注ぐ。だが、その旅は一本道ではない。農業用水や水道水、工業用水、下水と様々に姿を変え、都市部では地下に潜る。

そんな荒川の「水みち」を20年近く研究してきた、さいたま市のNPO法人「水のフォルム」理事長の藤原悌子さん(64)。4年前から同市の見沼田んぼで化学肥料や農薬を使用しない伝統農法に挑戦している。「水を追ったら田んぼに行き着いた」。麦わら帽子姿で、屈託のない笑顔を見せた。

水研究のきっかけは1993年。県内の調査研究機関の客員研究員として、「埼玉の水」をテーマとしたリポートの執筆を任された。関東平野の地層の成り立ち、江戸時代の大洪水と大改修、現代の利

見沼田んぼは「水のみち」

伝統農法に挑む都市住民



「おいしいコメができたわね」と、市民らと談笑する藤原さん(中央)。後ろは再生させた里山(昨年11月26日、さいたま市見沼区見山で)

水事業や水質汚染。「水」の奥深さにのめり込んだ。ただ「水」は行政の縦割りが顕著で、専門家の解説も難解になりがち。一方、ダム反

と水田を行き来し、一部は荒川に戻っていた。「田んぼは昔ながらの水のみち」と気付いた。

藤原さんは、落ち葉や米ぬかなど元々流域にある栄養分だけで育てる伝統的な循環型農法にこだわった。見沼の水には、稲の生育に必要な窒素とリンが上流で入り込んでおり、さらに化学肥料を使えば下流の水質汚濁につながる。

対論者の主張は一面的過ぎるように思えた。「総合的な見地で、一般市民にもわかる情報を発信したい」。2001年、水の調査・研究を目的とする編集者集団「水のフォルム」を設立した。

「水のフォルム」の有志とともに見沼田んぼに向かった。首都近郊に残された貴重な緑地空間で、広さ1260畝。その保護を目的に県が設けた

無農薬は楽ではない。作業はもっぱら草むしり。農園に参加する市民とともに、腰を曲げ、一株一株、根元の水をかき回した。秋には、水田の脇にある斜面林の間伐も行った。

年1〜2回、機関誌を発行して研究成果を発表。06年には、深谷市の六堰頭首工で取水される水の行き先を調べた。水路地図でたどると、周辺地域に細かく枝分かれし、

1965年の「見沼3原則」で宅地化は制限されたが、米の減反政策や農家の後継者不足で耕作放棄地が増加。水田から畑への転用でも、「水みち」の分断が進行していた。

うっそうとした林は太陽光の差し込む明るい里山へと再生した。落ち葉を再利用した堆肥づくりも始めた。重労働だが、「農家が手が回らないことをやらなければ、都市住民が参加する意味がない」と藤原さん。「水はつながっているんだから、下流への責任があるのよ」

次々と姿を消していた。「どこに消えるのか」。地図を見つめると、水田の姿が浮かび上がった。水は用水路

用水路は農家が代々守ってきた地域の財産。稲や生き物には「命の水」だ。藤原さんたちは、新田開発のため江戸時代に掘削された「見沼代用水」の清掃活動を始めた。地道な活動で農家らの信頼を得た水のフォルムは08年4月、特定農地貸付法に基づく市民農園の開設が承認された。市内で認定されたのは今も水のフォ

があるのよ」